

# タンチョウ博士のお話 (第3回)

今回は「タンチョウの頭はなぜ赤い?」「いつから頭が赤くなるの?」という質問についてです。赤い理由の質問は、長沼中央小 田中ゆり羽さん・O.Jさん・佐藤文音さん・金子真唯さん・H.Hさん・東大樹さん・たかはしいっささん・森下和奏さん・小山りんさん・K.Kさん、北長沼小 井形流一さん・真田千穂さん・石塚瑠愛さん・高田賢さん・浅原結友さん、南長沼小 M.Sさん・内田美咲さん・K.Hさん・M.Hさん、西長沼小 阪 勇輝人さん、舞鶴小 三上沙紀さん、長沼中 T.Aさんから、いつから赤いかの質問は長沼中 前多さくらさんから頂きました。

## ○頭(あたま)は「はげ」ている?

タンチョウ(丹頂)は「赤い頭」という意味でした。そこで、体(からだ)が白く、頭のとっぺんだけが赤い動物も、ぼくにちなんでタンチョウと呼ばれています。その例がキングヨとコイで、突然変異(とつぜんへんい)を利用してそう呼ばれる品種が創(つく)られています。

さて、ぼくの頭はなぜ赤いのかな? それを知るために、そこがどのような造(つく)りになっているかを、まず調(しら)べてみよう。

生まれて間もない、ぼくの頭(写真1)を見てください。赤くないですね。

1才近くなっても、まだ赤くありません(写真2)。では、生まれて3年くらいではどうかな(写真3)。そう、はっきり赤いところが出ています。しかも、白黒の写真でもわかるように、その部分(ぶぶん)の羽が、あれ? ない!!

つまり、1才半から2才くらいになると、そこが「はげ」てくるのです。羽が抜(ぬ)けて、小さな「いぼ」がたくさん集まった厚(あつ)い皮ふが現れます(写真3)。ここに血管(けっかん)が通り、中の赤い血が透(す)けて見えます。

これが赤い頭の正体(しょうたい)です。

みなさん、ニワトリを知っていますね。ニワトリには「とさか」という、赤い飾(かざ)りが頭にあります。じつは、ぼくの赤いところは、この「とさか」と同じようなものなのです。

しかし、ふしぎですね。赤いところは「はげ」て、皮ふが見えているのだとすると、では、なぜこの部分だけ羽が抜けるのでしょうか。首でも、ほほでも、あるいはのどでも、かまわないのに!

それに、皮ふの色も、黒くても白くてもよいはずです。コクチョウ(黒頂)とかハクチョウ(白頂)とかいうツルがいても、おかしくありません。じっさい、インドなどに住むぼくの仲間のオオヅルは、頭が灰色(はいいろ)の皮ふのため、赤くありません。さらに、アフリカにいるハゴロモヅルは、一生、頭は「はげ」ません。

なぜ、このぼくの頭のところだけが「はげ」て、しかも赤い色になったのか、残念ながらはっきりした答えが、まだ見つかりません。皆(みな)さんも、もう少し学年が進んで、進化(しんか)(生き物の形や色などが、長い時間をかけて変わること)ということを知うようになったら、ぼくといっしょに答えを探してみよう。

じつは、頭の「丹頂」は齡(とし)とともに大きくなりますが、3才をすぎると一定の大きさ(5×4センチメートル四方ほど)以上になりません。しかし、ぼくの気分(きぶん)で、広がったり(写真4)、もとへ戻ったりします。怒(おこ)っているとか喜んでいたり、気分の中身(なみだ)を示すことはできませんが、緊張(きんちょう)するといつも広がります。たとえば、喧嘩(けんか)とか、敵(てき)が来たとか、求愛(きゅうあい)のとき、などなどです。

そのため、同じ立ち姿(すがた)でも、ただぼんやりしているのか、緊張(きんちょう)して立っているのか=つまり「アタマにきている」のか=頭頂(とうちょう)を見てもらうとわかります。いわば、ぼくの心の窓(まど)ともいえるべきもので、ヒトとは違う生き物ですけど、ぼくの「心」を覗(のぞ)ける貴重(きんじゆう)な部分(ぶぶん)なのです。(文:正富宏之)



写真: タンチョウの頭  
(撮影: 正富宏之)